

島崎藤村に関する覚え書き

吉野山の無声と天知

——「哀縁」と「夕顔ぐるひ」其他——

田中富次郎

明治26年1月の末、教え年22才の藤村は古藤庵無声と称し、多年世話になった吉村忠道を裏切り、教え子佐藤輔によせる恋愛の苦悩と、芸術思慕のこころざしをだいて西行・芭蕉の足跡を追い、関西へ放浪の旅にでた。当時、無声の経済上のパトロンであった星野天知は、無声の決意に同情して、関西にはたよる人もないであろうと、天知を慕う女性の一人、明治女学校の卒業生で神戸頤栄幼稚園にいる広瀬恒子を無声に紹介した。恩人に別れ、友人に別れて関西に向うところを、無声は処女詩「別離」で詠いあげ、天知もまた送古藤庵と題し、（骸骨二つ重たさうなり霜の旅）と詠んで無声を見送った。骸骨とは、愛人をいう若い彼等の隠語であった。芸術と輔と、二つの骸骨を背負った無声は、関西へでる途中、（雪風飄々孤身をうづめる）琵琶湖畔に立ちより、石山寺を詣うで、持参したハムレット一巻を奉納して、紫式部の霊にわが芸術達成を祈った。（湖に浮ぶ詩神よ心あらば落ちゆく鐘のこなたに聴けや）と詠い、折から（寒山の一鵝狂客の腸を断つ）とくちずさんだのは、無声のせつない感慨であった。何よりも神戸へ足をいそがせて広瀬恒子を訪ね、（こゝにまた故人を見たり藤のかげ）という第一印象をうけた。佐藤輔の藤の花かげをしのびながら、この時から始まる無声と恒子の交友が、次第に深さを増して、次々に天知に報告されたのである。その第一声、明治26年2月7日神戸から天知へ送った書簡のなかには、（昨夜広瀬姉と快談数刻、これまた希世のすねもの、姿を変じたるラマバイの徒か。）（花は白きを辞せず、調は高きを辞せず、砕くべき骨は砕くるを辞せず、悲しむべきの悲しみは悲しむを辞せず、暗光の杖にはらひがたきもの、何ぞ無声の杖にはらふことを得ん、暗光の合羽に重しとするもの、何ぞ無声の合羽に重からざらん。）ということばが見えている。暗光とは、天知の別号であった。一ト月経過。3月1日になると、無声は天知に（広瀬姉も御家内様に病者ありて故山へ御帰りに相成）（広瀬姉の御懇情もあれば同姉を近江におとづれ、其より直に大和へ参り度心得）といい、この書簡の最後には、こんなことばが現われてくる。（広瀬姉は、一種の骨を供へたる詩人に御坐候。近頃御談笑相伺申候に、これまた霊光にうたれたる人に非ざれば、か程にはあらじと思はれ候。一日膝を叩て閑談仕候折、愚見にては二人のもの貴姉の胸中に逍遙し、一人はこの世の人にあらざるべきも、一人はこの天地に存すが如く、この二物、二にして一、一にして二ならずや、と申せしに、同姉は笑ひ居られ候。凡眼未だ徹せざるところあるか。されど同姉が心に、月花のあふれたるには驚入候。いづれ近江へ参り候上にて、今一応閑談を得んと楽み居候。）さて、その近江に、恒子の生家を訪問した無声が、滋賀県蒲生郡市ノ辺村から天知にあてた3月7日の書簡には、（当地へ参り、御世話様に相成居申候。加賀の千代も肥えて居り候由、にくき詩神は男子の瘠せたるを好み、女子の肥えたるを愛しそものかと、当方大笑ひに御座候。まことに意外なところに詩人を見つけて、愚生のよろこび御察し被下度候）といういいかたが現われてくる。

そのあと無声は吉野山に滞在し、ドラマの第三作「朱門のうれひ」の執筆にはいるのであるが、天知は音信のたびごとに無声と恒子との関係が、ただならぬ事態に陥ちていくのを見るにみかねて、ついに吉野山へでかけ、無声の宿所を訪ね、ここで恒子をめぐる二人の劇的な会見が展開した。おそらく若い日の藤村の関西放浪の旅で、最も小説的であったと思われるこの場面を、後年藤村は描きに描いた自伝小説『春』のなかで、不思議にもカットし、自分を岸本、天知を岡見、恒子を峰子と呼んだこの小説は、その第30回で僅かに、（岡見と岸本の二人が大和で邂逅<sup>めぐりあ</sup>つて、互に顔を見合せた時は、恰も悲い喜劇中の人物であつた。夫から二人の親友は妙に笑へなくなつて了つた。）としか書いていない。藤村のがわではこれだけしか語らなかったが、前述に引用した書簡や、のちに天知のがわから当時の状況に僅かにふれている『黙歩七十年』と、それに収録されている天知日記が発表されたので、これらから、藤村が秘めた吉野山の会見が、実は並々ならぬものであったと推定され、しかしそれ以上には説明ができません情景であると考えられてきた。はたして無声も天知も、ことのあった時期から後年まで、この事件的な姿にふれることをさけようとしていたのであろうか。本論はこの地点に焦点をおいて、これを追求してみたいと思うのであるが、結論をさきにする、吉野山の会見を、無声も天知も決して秘めてはいない。この二人は、ことのあった時期からほど遠くない日に、吉野山の劇的会見を素材にし、発想の根拠にして、その作品化のために互いにしのぎを削り、主として無声は「哀縁」で、天知は「夕顔ぐるひ」でそれを露出しているのであって、この点を本論では提唱してみたいと思う。まずこれを実証するために、昭和13年10月に刊行した星野天知の自叙伝『黙歩七十年』収録の天知日記の該当部分を引用しておこう。

（明治二十六年四月十一日 古藤への同情、憐愍、吉野へ出立 <以下略> 同十三日 神戸に恒子を訪ふ。八ヶ月見ぬ物語り尽るべくもなく翌日須磨に遊ぶ。甲に飢えたる情熱を乙に向けて慰藉を得るの理、偽ならず。 同十五日 須磨の漁戸独居、寂寥苦悩。 同十六日 舞子の松のくねり、須磨温泉の長閑さ、年上の妹といふ者あらば、それは今日の恒子なり。 同十七日 大阪より吉野へ、途上二僧に縁あり、強いて高野へ同行さる<以下略> 同十八日 寺院一泊<以下略> 同十九日 五条を廻りて吉野へ、山中無声を訪ふ。孤影少々完からず、花散りて幽かに鳥声を聴く。果して大微笑の悟ありと聴く。 同二十日 山中俳僧、莖を拈して苔清水に浮世を洗ふ。燈下無声の激語を聞く。空谷笈を聴くの感あり。秋羅<恒子>に期待を持たしめたる吾不用意に愕く。 同二十一日 山陵を拜して泣く。 同二十二日 山中の温泉に浸り突然帰心を促す。無声先づ下山、狂的也。大阪駅にて分袂、彼は神戸へ、我は帰京、囊底を無声のために払つて、吾は車中絶食坐禅。）

『春』や書簡もそうであるが、天知日記もまたこれだけしか語っていない。吉野山の会見については、これらの資料を中心に考える以外に方法をもつことができないので、従前からその考察もこの域をでていないが、無声も天知もこのことを、意外にも作品のうえて多く語っていると私が提唱してみたいものの第一は、「文学界」11号に発表した無声の「哀縁」である。最初にこの作品を考察してみよう。

まず、この散文詩風の美文の内容を紹介すると、とある小川のほとりに今しも釣をする一人の少年がいる。そこへ紅い花が流れてくる。紅い花は少年に何を釣るのかと尋ねるが、少年は、はじめ無関心であって返事をしない。が、次第に紅い花の心が懐しくなり、やがてこんどは少年のほうから花に向って、何処から流れてきたかときく。その時の少年の心は、も

はや前の心と同じではなく、心はずかしく何処へ流れて行くのかと花にきくのであるが、紅い花は知らないと答える。少年は、お前のような美しい身で、なぜに流れの身となったかと尋ねると、花は少年のその心の優しさを喜び、ただ漂い流れる身であるという。少年は、春や秋のさまざまな花を知っているが、こんなに心を悩ます花を知らないといい、私の寂しい心を負うことができるかと尋ねる。花はおじける様子もなく、そういうことをいう人に幾人も私は出合ったが、それに対して弱い心はわが心であった。そのなかには、詩人も画家もあったと語りながら、少年と花は、共に歩み共にとどまる。少年が、（花よ、花よ、汝は何故に水の中流に浮んで流れざるや）と問うと、紅い花は、自分は岸に沿って流れるのがすぎだと答える。岸边には岩があり、枯木があり、その美しい姿を失うではないかと少年がいうと、紅い花は、なぜ少年は岸を歩くのかと反問し、一步誤れば水に溺れるではないかといいかえす。こうしているうちに、雨ははれ、日は落ち、夕暮となる。秋の夕べの別れは淋しい。少年と花が別れかねていると、花が木屑に絡まるので、木屑から花を再び水に浮べようとして、少年の右手が、僅かに紅い花に届こうとした時、（古苔幾百年のさびに滑つて童子は花と共に沈みぬ。）というのが、「哀縁」の内容である。

ここで注意したいのは、上述の内容は、『若葉集』につづいて、明治31年6月に刊行した第二詩集『一葉舟』の散文篇へ収録した「哀縁」の姿であって、合本藤村詩集のなかにも収められたこの「哀縁」が、初期藤村の散文として多く読まれてきたのである。ところが、「文学界」11号に発表した初出「哀縁」は、記述量のうえでも『一葉舟』所収の「哀縁」の倍にちかい。いい代えれば、「文学界」に発表した「哀縁」を、藤村はのちに『一葉舟』へ収める時、半分ちかく削除したのである。しかも、あちらこちらを訂正削除したというようなものでなく、作品の丁度中間あたりを、ゴッソリとまとめて削ったのである。では、その削除した部分が、どういう内容をもっていたか、それを次に説明してみたい。

削除したのは、初出「哀縁」のなかほど、紅い花が、岸を歩いた人のなかには詩人も画家もいたと答えるので、少年はそれをききながら（長途の草の枕を詫びて、心の友にめぐり逢ひたらんようにも覚えられ、花流るれば童子もまた花と共に歩み、花止まれば童子もまた花と共に止り、はてはかの花の姿のゆかしく、なつかしくわざとらしくまなこそむくれば、寂しさ衰しさいはんかたなし）という部分につづくところから削ったのである。削除部分の大意は、少年と紅い花が共に歩み共に流れながら話していると、そこへ一人の男が現われてくる。いそいで少年は草むらに身をかくすが、男と紅い花とは何か自分の噂をしている気配なので、たまりかねて少年は飛び出し、久方ぶりで出合った男と少年とは激しい口論をはじめ。次第に興奮して、最後には少年が男に掴みかかろうとすると、その時、にわかになにの姿が消えた、というのが削った部分の内容である。これだけを削って、花よお前はなぜ水の中流を流れないのかと問いかける部分につなぎ合せたのである。初出にあったこの部分を、どうして『一葉舟』では削ったのであろうか。削った部分に現われてくる少年と男の口論が、実は吉野山で、無声と天知の間に生じた論争を描いているからであったと筆者はいいたい。原文に沿って、そのことを次に立証してみよう。

削った部分の冒頭（折しも人の来りしけはいにて、花は逸早くそれとさとりしにや、急そぎ物のかげに隠れてよ。しばしが程しのびたまはば、やがて立去りぬべしなどほのめかすに、童子いよいよ花の心のおかしくなりて、彼も人なり。我も人なり。あながちもの陰などにうちかくれ、人に笑はれむやうの事せむもうしろめたからずや。いや。いや。花のいふ

こともききたまふものよなどむつまじき言の葉の心にうれしく、あだかも忠僕といふもののやうに、一意外目もふらで草むらの影にうづくまり、花よ花よとよしなき三昧をこらす。) まずこの辺は、無声と恒子との交友が進み、天知の出京の気配を知って、無声は吉野山にたてこもり、ドラマの制作に没頭しながら(花よ花よとよしなき三昧)に身を隠す状況をいい含めているとみたい。つづいて原文はこう書いている。(きけばものめかしく心にくきさまして、花とかたらふ人の声あるいは高くあるひはしめやかに、我さへこころ浮かるるほどなるをと、さすがに少しは妬ましきようにて、何をいふにやと耳そばだつれば、もてきつる歌などほがらかに吟じ去り、やがて楽しげに我の噂さするやうなり。さては曲者め。さぞや悪しきさまに人のことなど罵るならむと、心は火のごとく燃ゆるばかりなり、蓬々たる秋の草間を分けて、ちらとのぞくに、世にはいみじき男のあるものかな。きびすを破り、おもてをこがし、髪はわづかに谷河のほとりに洗ひて、日々河ぞひにさまよへる吾姿を比ぶれば、色は白き百合のごとく、口唇は紅き梅花のごとく、やはらかき黒髪は風に吹かれて、わざとならぬ物の匂ひさへしめやかに人をうつばかりなり。されどあながちに優なるばかりにもあらず、巖頭に立ちてかうかうしき歌一つうたひ、吟声空に澄み渡りて水鳥を驚かすさまなど、おのづからたくましき風情もあらはれて、譬ふれば彼は太壽の朝日を洗ふほとりに、うらかなる鳥の声を聴きながら、詩を吟じ、歌を唱し、あるひは高く笑ひ、あるひは遠く走り、風にもすそを飄へす風情あるを、我は夕暮かけてひとり寂しき森の樹陰を徘徊し、山のはに落つる鐘の声をかぞへて、あるひは花に泣き、あるひは露にむせび、首を垂れてしづかに歩むさま我ながらあやしと覚ゆ)。この辺の彼我の比較には、幕府の御用商人の由緒をもち、日本橋の砂糖問屋伊勢屋星野家の当主という財力の背景をもった天知が、海の近い鎌倉の別荘で、詩歌を詠いあげている豪放な姿と、恋と芸術の苦悩を負って関西を放浪する無声のわびしい姿とが封じこまれている。当時平田禿木もまた(羨ましきは天知翁なり、超絶して天外高く翼を拡げ)などと天知を評し、後年『春』77回で藤村は、天知の風貌を(長めにした癖のある髪、すこし蒼ざめた広い額、種々な境涯を経て来たらしい顔)(いかにも男らしい沈着<sup>おへつき</sup>を具へて居て、それで何処かに常道を歩みさうもなさうなところがある。任侠と言つたやうな豪放な気風と、隠者に見るやうな用心深いところが、一緒に成つて混つて居るやうにも思はれた。斯の人が岡見だ。)と描いているが、その岡見がみごとに「哀縁」のなかに、その姿を現わしている。

さてこれにつづく部分は、少年が草むらから男の前へ進みでる情景であるが、少年を見て、まず男が次のように口をきる。(いかに釣を好める人、けふこのごろは会堂のうちにて君の影を見ることなし。この前の日われは姉と共に行き、その前の日われは母と共に行きけるが、例の大なる「ストーブ」の影に君の見えざるはいかにぞや。このごろの賛美歌、「オーガン」、花、説教、げに一ツとして心に楽しからぬはなし。さてもいみじきものしりとはなれつらむ。)と、男は少年の教会退会を非難する。しかし少年は男に向って、(ああ神仏は盲目なり。もし盲目にておはさざりせば、かく迄恨み多き人の世にはあらざりしものを。)と答えると男は、(おろかや。おろかや。いかで神仏の盲目なるためしあらむ。)と少年をせめる。少年は男の声をおしかえして、(いな。いな。誰か世に盲目ならざるものやある。花にまよひ月にあくがれ、雨にぬれ露にふす。臥すより早く露の命をなげくものは誰ぞ。嘆けかむ迄の命とは知りながらまた花と月とにまよはんとするものは誰ぞ。)男は、(おろかなことを言ふ人かな。世を造り人を造りたまひし神をあがめまつることもせで、いかになり

行く身の程と知るや、知らずや。）と問いつめるのであるが、少年は、（いな。いな。いな。花の外に露多く、露の外に花多し。けふといふけふの人はきのふの人にあらずして、あすといふあすの花はけふの花に同じからず。あたたかき「ストーブ」の影、高らかに鳴りひびく「オーガン」のほとりのみ、会堂といふものにもあらぬべし。われは岩に眠り、草に臥し、水鳥を友として釣をたるのみ。一つの草にも説教あり。一つの岩にも賛美歌あるべし。）と、教会退会のことをきっかけに少年と男との問答は、宗教に関する論争を展開し、少年の声のなかには、関西放浪時の無声の教義にあきたらない忿懣と、芸術と恋愛にひたむきな熱気とが示されている。男は少年に向って、（おかしや今一度いふて見よ。小児のくせに世をすねたりとて、魚鳥を友とするは仙人の業のみ。けふといふけふのいとなみを知らずしてひたすらに水のほとりにさまよふこそをかしけれ。）と迫ってくる。おそらく天知は、無声のものの考えかたがすね者であると感じ、その点を強く攻撃したものと思われる。男から（をかしけれ）といわれた少年は、（をかしとは何事ぞ）と男に迫り、（眉をつり上げ、顔は赤くなりて言はんとして口ごもり、胸は充ち、心はせまり、とかくするうち秋雨ほろほろと落ち来りて、かの人の影いづこともなく消えうせぬ。童子はひとり残されて、袖をかみ、こぶしを握り、顧みれば花は遠く雨にせかれて。かなたに流れ行くを飛ぶが如くに馳せよれば、あはれ先立つものは涙のみなり）と、二人の口論が次第に激昂したものとなっていく情景と、二人の俄かな袂別とをわいている。この辺は天知日記が、（燈下無声の激語を聞く。空谷嚔を聴くの感あり。）と記していることを、みごとに無声のがわから裏づけているものといいたい。削除の最後の部分は、これにつづいて、（花よ。花よ。ああ世にわれほど心弱きはあらざるべし。われはかの人の前に向ふとき身は虫けらの如くにも覚えられて、ただただ心細きを命なるに、いかなれば汝の前に向ふとき、かく迄に我身の強きを覚ゆるぞやといへば、さ嘆きたまひそ。人はさやうの心もちてこそ。聖のおんあはれみにももれぬべけれどいふ。）と、激したつた吉野山会見後の無声のやりどころのない気持と無声を慰める恒子の声とを示している。以上が削除されたほぼ全文であって、『一葉舟』発表の時はこの最後の部分から、（花よ。花よ。）という呼びかけの詞だけをいかして、次の（汝は何故に水の中流に浮んで流れざるや）と結んだのである。

吉野山の出来事があってから僅か半歳後に、無声は散文詩風のスタイルで装いながら、実は生々しく吉野山会見の劇的場面を投入した「哀縁」を、敢て「文学界」に発表していたのである。だが、さすがに『若菜集』を詠いあげた藤村は、あまりにもねりのたりない初出「哀縁」の描写の部分を、いさぎよく削って、あとさきを結び合せせ珠玉の散文「哀縁」に整頓したが、もはやその時は天知に双方向ほどの必要もなく、却って天知に対する敬虔な遠慮がそうさせたのであったといいたい。もっとも後日「哀縁」から雑物を削った理由には、「哀縁」の発想に、一面ゲーテの影響があったからではないかともみられるので、それに就いていい添えておきたい。無声が「哀縁」を発表した「文学界」の11号に、戸川秋骨は「ゲーテが小河の歌」を寄せている。それは原詩を引用し、訳をのせ、所感を添えた一文であるが、つづいて秋骨は「文学界」14号にも、「花のゆくゑ」と題した文章を寄せている。そのなかに、（海辺の近くに幅一間にも足らぬ程の小河あり、わらべの七ツハツばかりなるが、流に沿ひてさまよひ行くを見しに、ワイマルの詩聖が歌ひしもかかる際のものにやあらんなど胸に浮べば、何時の間にかわらべの前に名もしれぬ花の一枝流れ付きぬ、わらべは好きものを得つと岸にふるれば押しやり、藻くずにからまれるれば取り上げつ、いとど興に入り花

のゆくゑを慕ひては流れを追ひて下りけり、いかなる縁か、われも亦何とやらん氣にかかれば彼の「哀縁」の事さへ思ひ出てさすがに捨てがたく、流るる花をうちまもり）流れを追ったが、花は浪にもまれて沖の方へ消えたというところがある。秋骨のゲーテ小河の詩の紹介が「哀縁」と同時に現われ、その秋骨がその後ゲーテをしのびながら、無声の「哀縁」にふれているところを注目したい。『一葉舟』の「哀縁」は、一面ではこのゲーテの方向で整理されたともいえよう。それにしても「哀縁」を、初期藤村の朦朧体の美文にすぎないとか、ノバリスの『青い花』の換骨奪胎であって、「文学界」のロマンチズムを示しているというような漠然とした評価はすべてあたらない。藤村に初手からあるものは、生活経験に誘導される作因であって、「哀縁」の紅い花は誘惑の象徴であるが、その発想の根拠に恒子のイメージを十分に持っていたといいたい。藤村の出発点には、『若菜集』になるものと、『破戒』になるものだが、同時に、混濁として渦を巻いているのである。

さて、初出「哀縁」を発表した頃の無声には、どうも天知に対して何か釈然としない気持ちが底流していたように思う。というのは、この「哀縁」の余燼が、ここから二ヶ月たっても、なおくすぶっているからである。そのことを次に説明してみよう。翌明治27年の1月になると、「文学界」も一周年を迎え13号を刊行、この号に無声は「草枕」と題した脚本を発表した。この「草枕」のまえがきで、作者はこんなことをいっている。本郷龍岡町に住む友人の善罵先生（馬場孤蝶）が、こんなけがらわしい原稿は焼いてしまえといったが、編集担当者の平田禿木は、これもいいではないかというので掲載することにしたが、読者よ許せというのである。しかもこの作品によほど自信がもてなかったのか、作者は次の「文学界」14号からいよいよ用いはじめる藤村のペンネームも、もちろん無声の名もさけて、再び女学雑誌時代へ戻り無名氏と署名している。このように作者自身も躊躇しながらこれを発表したというのは、たしかに、「草枕」がアダムとイブの楽園追放の姿に仮託した卑調な作品であったからであろう。明治26年の秋、関西放浪から鎌倉あたりまで戻ってきた無声は、裏切った恩人の家へにわかには帰ることもできず、透谷の世話で遠く岩手県一の関の熊谷家へ家庭教師にでたり、それも短期間で再び円覚寺帰元院に戻ったりしていたが、ついに品川の遊びで青年の純潔を失い、荒涼とした生活のなかへ陥ちこんでいた。「草枕」は、そうした時期を背景にして発想された一種の自嘲的記念作であったのである。強烈なモチーフをもっているが、当時のみじめさがあまりにも露出して、作品としては、あらあらしい手にあまるものになってしまったのである。自嘲的という意味では、この作品のアダムによびかける悪魔の声は、どこまでも黒い誘惑の声である。しかしこれを「哀縁」の系脈のうえでみつめていくと、アダムとイブの恋を切断して、二人の恋を色にしようとする悪魔の声は、童子と紅い花の語らいを切断しようとする「哀縁」の男の声、いい代えれば無声と恒子の本来の意図をさこうとする天知の声で発想されている。「草枕」に「哀縁」の残影があると考えられるのは、「草枕」の悪魔の声のなかに、ここでもまた吉野山の天知の声が混っているからである。

そういえる一、二の点を指摘してみよう。脚本形式の「草枕」は上・中・下の三つの場面を、川の流れに沿った土堤ということにしているが、これは「哀縁」の情景と同一である。同一になるというのは、吉野川に沿って展開した無声と天知の花下風狂のイメージが、ここでまたはたらいっているからであろう。まず悪魔は、（慈悲もなく親切もない我と思うか。）とアダムに向っていくが、これは天知日記にも示されている天知の一面の仁俠的姿勢であ

る。(今あの岸の花蔭で。イーブに一寸逢ふたらば、まあアダムはけな奴ぢや)と、イブがいったと悪魔が、アダムにまず告げる。「哀縁」の削除部分もそうであったが、こういう構想が現われてくるのは、天知が吉野へはいる前、神戸や須磨で恒子と会談していることが、無声の腹にすえかねていたからであろう。だから「哀縁」の男と同じように悪魔は、天知の吉野入前方の行程と歩調を揃えて作品へ登場してくるのである。さて、「草枕」の悪魔は、(是アダム。恋などはせぬもの、ちと人らしく思ひ切れ。)(ああ弱い奴。あはれな奴。畢竟其腰抜から事起る。是アダム。こうしたうつくしい姿をしていても、天ばかり眺めては居られまい。)と、アダムをしきりに誘惑するが、アダムは悪魔に、(もうもうイーブイーブと言ふて下さるな。見るもくるし見ざるもくるし。)(思ひ切るの切らぬとはアダムが恋の一昔かし。それは底ある水の事。今は底なき恋の淵。)(といい、こういいながらアダムは(＜傍へ向き＞)(いや見掛ほどにも無い悪魔の悪。)(アダムが恋の一通り、情をつくして述べた為、流石をそろしい悪魔さへ、ホロリと落して居るそうな。)(という独白の姿勢をとっている。無声に恋をあきらめよと天知が説得しているのであるが、この辺、後年『春』で、(恰も悲い喜劇中の人物)といった藤村の天知に向う微妙な態度が、チラリのぞいているとみたい。悪魔に誘惑されたあとアダムにイブがこう尋ねている。(さつきこの流れのそばで、暫く話をなされたは、ありやどうゆうものでござんすへ。あのこの胸がどきどきとして、尋ねて見ねば安心ならず)。おそらくこれは、予定よりも早い4月22日、吉野を下山して再び神戸へ戻ってきた無声をきづかって、恒子からいただいた質問の声であったと思われるが、これに対する無声の答を、書簡のうえでみると、やがて5月下旬から石山寺門前の茶丈で自炊生活を始めた無声が、6月1日、神戸の恒子に吉野山いらいの心情をこう書き送っている。(何事も諍論の心にあらずして同情の眼を以て見るときは、一人として捨てべき人は無御坐候。如其命、昨日の路と思ひしところ今日の路と思ふところに異なれるは可有之、されど僕は昨日と今日とを問はず、はじめより天地に恥づべき路と知って、之を歩まんと思ひしことは無之、昨日の路あやまれりとて僕は之を恥ぢず、今日の路に来るべき階梯と信居候。僕は路を尋ねんとする志深ければ、又路に迷ふこと深きを知る。僕は殊に不完全なる人間なることを知れば、少しも心中の弱点と缺点と迷ひとを処して信友の前に反省を求めんことを恥ぢず。又これが為に誤認さるるを恐れず。ただ無能無徳にして重荷を負はんとする僕の身にして、他人をつまづかすごときことあらば、これ未だ僕の至らざるのみ。夫れ互勵互諫は友の道也。君にして僕にあやまてりと信ずるところあらば、少しも御遠慮なく、注告をたまはれかし。)

さて『春』の一行以外は語らなかったといわれる吉野山の会見を、無声は「哀縁」や「草枕」という作品化によって、そういう苦肉の方法で大いに語っており、すでに無声のがわから天知に向って挑戦の矢が放なたれていたと筆者はみたいのであるが、この放なたれた矢をうけて天知もまた立ちあがり、作品のなかで吉野山の会見を天知の立場からさかんに語りだしている。次にその姿を紹介してみよう。「哀縁」の発表に一月おくれて、「文学界」の明治26年12月号に天知が掲載した「白露の夢」、つづいて明治27年の1月「文学界」13号に発表した「夕顔ぐるひ」は、すべて吉野山の会見に発想の根拠をもっており、こんどは天知の方から無声に切りつけた鋭い矛先であったとみたい。無声も天知も語らないどころか、劇的な会見の印象を主要なモチーフにして作品化をいそぎ、半歳後には、作品のうえで再び激しい火花をちらしているのである。

まず「夕顔ぐるひ」の前奏曲ともみられる「白露の夢」の内容を紹介しながら、これを考察してみよう。この作品は、天知が破蓮坊と称し、旅にでるところから書きだしている。（花にはなまじ同伴は邪魔）と、破蓮坊はひとり旅をいそぐと、とある（古びし無住の古院）にぶつかる。院のなかで（幽かなる火影）に向う（妙齢なる花の御姿）をみいだした破蓮坊は、（必定これただものならじ、引捕へて本性を現はしくれん）と、女に近づき（何のわけありて斯る所に独り居給ふや）と尋ねる。すると女は、（お羞かしき事なれど妾に男二人侍りし）といい（始めの御方は果敢なき者の便りより不図思はれまつりしに、三歳が程は末の松山変らじとの色見えしが、さる女子の嫉みおそろしく、それよりうとうとしく）そのお方とは別れてしまったが、いらい妾は世も人もはかなく思われ、墨染の衣に身をかえた。ところが（情け深き或御方の垣間見より）再び恋する人ができ、その人が（人目なき所に語らはん）というので、（殿が誘ふまにまに忍び出で、殊更に人來まじき隠れ家もとめて終に此室）に住む身となったのである。しかし（此君にはあだの赤縄に結ばれたる御方もある）ので、（その人びとの御心を察しては、なかなか口惜しき思ひやらる）るばかり、（女子の弱き心飽まで推して給ふてか）破蓮さま、と女は声を濁らせ、涙を拭い破蓮坊に語るのである。（さてさて面白い御物語り）と、この作品、この女の話破蓮がきいているあいだはおだやかであるが、次第に破蓮は女ににじりより、女もまた破蓮に向って膝もくずれる姿勢を示していく。やがて破蓮は、（此室になつかしさを忍ぶ御方は今申されし垣間見の殿なるべし、其御方の心中だてはいかがにや、苦しうなければ迷惑御かけ成されし償ひとして男ごころを聴かせ給はるべし）と女に言うと、女は（どふせ殿御の真実は分りませぬ妾なれば談りても甲斐なからん）とすねる。この辺の叙述がこうなってくる。（這女頗るもの、すねてからかふて男を迷はす手練もあり、余り乙女と見て失敗ツたりと思へば。あやまりました許して下されといふ。いいえ許しませぬと俯向く。これ腹を立つもので御座らぬ、芳野山の上人様に叱られますわと、其背を撫づるにいいいよむづかる。これこれとすかせば身を投出してこちらの膝にもたれかかる、これは大変と身を引かんとすれば。サア動きませぬ誰が来ても離れませぬ）という始末に破蓮も仰天して、（思はず大の噓一ツ、発句生。）しかしこの作品の結びは、くしやみをした破蓮が、（あたりをいぶかりて見廻せばまだ初夜の頃なるべし、月は皎々と白くあがりて疊の上に松影は見へね、障子にうつるおかしき蔓影は何ぞと見れば、あはれに優なる檐端の夕顔なり、さては今は今の仮寐の夢なりし）と夢ものがたりの形にして閉じている。鎌倉から一気に神戸へでた天知は、恒子を訪ね、共に須磨に遊び、（ハケ月見ぬ物語り尽るべくもなく）（甲に飢えたる情熱を乙に向けて慰藉を得るの理、偽ならず）と察知し、当時これをこう天知日記には記録した。「白露の夢」は、この記録の作品化であって、須磨へ同行した恒子は、ライバル松井まんの嫉妬のために天知をうしなった苦しみや、無声の垣間見によって新しい恋を得たものの、その無声にも佐藤輔のあることを知った歎きなどを、おそらく身悶えして天知に訴えたのであろう、そのいきさつが「白露の夢」の発想の根拠となっていることはきわめてあきらかである。ことに（吉野山の上人様に叱られますわ）などという一語は、思わずそれを露出しているといいたい。この作品に対して、そういうみかたができるということは、つづいて発表した「夕顔ぐるひ」の作因が、吉野山の無声と天知の会見にあったことをいちだんと裏づけるものであるといえる。次にその問題作「夕顔ぐるひ」を辿ってみよう。

（真善美のおかしききわを見破らんとする鳥獣のすね者、かの破蓮坊とやらいふ男、怪し



くも檐端の夕顔に誂かされて白露の夢に現（うつつ）ころなく）（嘘一ツが縁となりて其翌の朝より風の心地と打臥せり。）と、「夕顔ぐるひ」は冒頭から「白露の夢」の連作であることをはっきりと示している。そしてこれにつづいて、同じ号の「文学界」に掲載された無声の「草枕」に呼應したのであろうか（イブといふ者殖えそめてよりアダムの墮落は手柄か不手柄か）などという皮肉ないいかたが現はれてくる。風邪に臥した破蓮坊は、（風の心地もようやく癒えぬ。されど癒えがたきは夢の哀れごころ）、そのため（うつらうつらと兩三日を過ごせしが、深く思ひ立つよしあり）（『今日より暫らく野ざらしの旅に出立いたし候』）といい残して、（夕顔狂ひの浮名を負うて先づ鳩照る月の石山でらへところざしぬ）と、まず石山寺へ向うのである。（やがて大湖こへて参り着きしは神こもる石山寺なり、湖も西より暮れぐれて亘りくる夕風心地よく、どうせ今宵は参籠と思へば門前の宿にゆきて云々のよしを計り、宵の頃より本堂にいゆきて内陣に籠り居り、ひたすら美文の開運を祈り花運長久さへ密かに一心を籠めたりける）。さて内陣にこもった破蓮は、やがて石山寺の紫式部に向って苦情をいろいろと具申するのであるが、破蓮が訴える最初の苦情は、（これサ紫どの、そもじが秘蔵息子の源氏どのも、ああいふ悪性のいかもの喰ひでは、一夫一婦の世の中に、罪じや浮気じやと、果ては不道德の美は不都合じやに由てと、古臭いグreek仕立の論法で、美文どころか臭悪文じやと非難さるるに成るじやげな、とつてもつかぬ善即美論、これも浮世のお笑ひ草じや）と、源氏物語の主人公の悪性を突く毒舌を吐く。この辺この作品のもつ寓意はなかなか巧妙である。巧妙であるというのは、関西放浪の当初無声が石山寺に参詣して、ハムレット一巻を奉納し、わが芸術達成を紫式部の霊に祈ったことも、のち5月下旬からは、石山寺門前の茶丈で自炊生活をはじめ、源氏物語や猿蓑に由縁をもっているこの土地に滞在して、芸術や恋愛の問題に苦しみ、頭を叩いてうめきふすような日々をおくったことも、天知は百も承知のうえで最初からこういう諷刺的な場面設定をとり、無声に向ってものをいおうとする天知のころを、いちはやく吐き出しているからである。破蓮が紫式部に向って、その所産である源氏の行動を非難しているようにみせているが、実は、作者の天知は、この式部の奥に恒子のイメージをおき、源氏のなかに無声のイメージを投入して、恒子に向って無声の行動を非難するころを、まず発散しているのである。しかもこの部分の文章に、何々（じや）という語句使用の多いのも、あくまで無声を念頭においての天知の手のこんだシヤレであるといいたい。というのは同時に無声が発表している「草枕」のなかには、悪魔がアダムに向って、イブはお前をこう分析しているぞといい、お前は（弱い奴）（あはれな奴）（うじ虫）（腰抜け）（高慢な男）（己惚な男）（気の変わり易い男）（欺され易い男）であるとよびかけている個所がある。これは当時の無声の自我分析ともいえるが、この発想の根拠が問題であって、さすがに天知は無声の発想の秘密を知っていたのである。明治25年7月から無声が「女学雑誌」でシェクスピアの処女詩ビナス・アンド・アドニス（ビナス）を「夏草」と題して翻訳紹介した時、ビナスの自我分析を、（無慈悲ぢや、馬鹿ぢや、不具ぢや、皺くちやぢや、邪見ぢや、曲りぢや、胴声ぢや）などと訳しているので、その手法を下敷きにして、すなわち（グreek仕立ての論法で）、無声がアダムの分析を書いていると、天知はみてとっていたからである。「夕顔ぐるひ」を「夏草」の語句の調子に合せ、無声の文章を揶揄し、面白がっているのである。面白がっている間はまだ罪もないが、この作品の天知はこの程度で筆をおさえてはいない。これにつづく式部への苦情は、いよいよ強烈なものになってくる。

(これサ式部さま未だ聴たい事の御座る、箸にも棒にもかからぬ源氏どの、道理でゆかぬが美の世界じやとて、出もの腫もの恋は処を撰ばぬとて、人もあるおとと様の寵愛もの藤壺の更衣にそもそも血を湧かすとは大それたお心ざし、包むに余る袖の薫りを空蟬の堅いお方に遷すも仕方なけれど、夫ある身とてつんと弾かれては幕切れ調子の悪いは尤も、もゆる若草狂ひ増して庄ゆれば跳ね和解むれば強うなる酒飲み同前、狂ふ心は夕顔といふ美術の檜舞台にひき出されて、手も足も萎しびれ心も花よ身も煙りよと、これも亦尤もじや、ところが恋様果敢なく逝去りては死なん斗りに病に打臥し満身の血は濺ぐ美術のあてなくや、大泣きに泣き大もだえに悶える所、さもあらんこれも亦尤も千万)。どこまでも源氏物語に事よせて話の筋を展開しているようにみせているが、作者天知の底意はどうしてそんなものではない。この辺の(おとと様の寵愛の藤壺の更衣)を、ここでもまた天知の愛人である恒子にあて、夫ある身の空蟬を、許嫁のある佐藤輔にあてていれかえたら、この文章は一体どういうことになるであろうか。箸にも棒にもかからぬ無声の奴、大胆不敵にもわが天知様の愛人恒子に手をだしはじめたが、あの男の心のうちは輔でいっぱい、しかもその輔に鹿内豊太郎という許嫁のあることを知ったので、いよいよ恋も絶望と身悶えて泣いているのだと、みごとに関西放浪時の無声の驕慢、憔悴を突き、これを諷して余地がない。「白露の夢」もそうであったが、おそらく天知と恒子との須磨の語らいは、これにちかいものであったろう。

「夕顔ぐるひ」の筆は、これにつづいて更に苛烈となっていく。〈これも亦尤も千万〉(と斗りなればよけれどももさても言ひぶんは這所に御座る)と、破達は式部に向ってひらきなおし、(このわづらひのまだ消へやらぬにいかにか好ものなればとて、雀の子を遁しつるわとべそかき給ふ十ばかりの子供を捕へて、美術とするはよけれども、何事ぞ恋三昧のふざけ放題、藤壺の御方の代りに明くれの慰みにも見ばやなどと贅澤いふも程があり、これが怪しき赤縄とや申すじややら、斯道未熟のそれがしには斯る恋路のあるものにや、いかに候ぞ承はると。板床たたいて再び三たび問ひ試みる砂蓮の物数奇)となっている。藤壺の姪若草の上に仮託したこの辺をこう考察したい。広瀬恒子の生家は、現在の滋賀県八日市市東市の辺、当時の蒲生郡市ノ辺村にあって、恒子は広瀬家の庶子。生母は、なか女。養母すみと父新太郎との間には、又治、新治という兄があり、又治と妻みつとの間には、俊吉とその妹の宇野があった。又治は、明治23年頃から草津の方にて、大丸という屋号で果下一、二をあらそう醤油店を経営していた。恒子は、明治元年9月21日生れであるから藤村よりも4才年長。甥の俊吉は、明治16年1月1日生れ、無声の関西放浪時は11才。当時、市の辺の恒子の生家は、丹毒丸などをうる薬屋であったが、無声は広瀬家滞在中、俊吉少年を手なづけ、少年文学を読ませたり、綴方の添削をしてやったり、恒子の歓心をしきりにかっていた。天知には、それが堪えられなかったのであろう。その忿懣がこの辺に投げだされているのである。先年筆者が広瀬俊吉家を調査した時、今もなお東市の辺に住んでおられる俊吉老人は筆者に、(藤村が少年の我に小鳥でふ文綴らせし世も今ははるけし)という歌一首を示し、古いメモ帳をとりだして、あの頃藤村は私に題を与えるから文を綴れといい、「小鳥」と題し註として(木の枝にさえづる小鳥をみるとかごの中にある小鳥をみるといづれかよきもし木の枝にさえづる小鳥をよしとしかごの中にある小鳥をよろしからずとせば何故によろしからずや)とかいて与えてくれたので、もちろん木の枝の方がよいが、籠の中の小鳥も籠の中からでれば、うれしげに飛ぶであろうということをかいたら、藤村はよしよしといってよろこんでいたと語りつづけた。さらに俊吉老人は、あれから60年になると感慨に沈みながら、私の

心に残る印象では、恒子と無声の愛情は、恒子が七分無声が三分であったといえるだろう、無声と恒子が話をしているところへ私がとびこむと、二人の対話は急に芸語に変わったし、叔母の書斎をうしろからのぞくと、恒子は日記をかきながら泣いていたなどと遠い日を回想して述懐された。

さて「夕顔ぐるひ」は、これにつづくあたりから趣向がすこし複雑になってくる。破蓮が式部に向って源氏の所業をなじっていると、（もとより人<sup>ひと</sup>気なき所なれば）式部の（答へる声あるべくもあらぬに、すねたる恋にや侍るべしと沈み澄みたる女子の声聴こゆ）、何者の声かと、この声に驚いた破蓮が、あたりを窺うと、声の主は今しも石山寺の賽銭箱の前に身をかがめて、一心に願いごとをする若い女。破蓮はそこでものかげから、その女の願いごとをひそかにきいてもらい泣きをするが、次の日も、またその次の日も、その女が参詣にきては願いごとを繰返すので、七日すぎた或日、破蓮は夢のなかでその女が天津にいることを知り、天津へでかけて夢に現われた（髻ある尼さまの庵）をさがしあてて。（見れば二十才<sup>はたち</sup>の上を三ツ四ツも越せしにやと見ゆる、若き姿の病み給ふたるは此庵<sup>あるじ</sup>の主人なり）（さもこそと思へば談はぬ先に胸まづ塞がりてやや言ひだすべを知らず）と、悲しくなったが、しばらくして破蓮は、（そもじ様のもとまで夢合せに参りぬ）といいだすのである。破蓮が女の庵を訪ねるこの辺の叙述は、須磨で恒子に会ってから吉野山中の無声を試ねる天知の姿を示しているといいたい。石山寺の賽銭箱の前で願いごとをする若い女とは、石山寺門前の茶丈で自炊をしながら詩神を祈る無声の姿であり、（髻ある尼さま）とか、（二十才の上を三ツ四ツ）とか、すべてが美青年無声を女性に仮託した諷刺的手法でうごいている。天知の鎌倉の草庵へ無声の方からくる書信は、恒子との関係がいよいよ色濃くなっていくことを示すので、そのことをたしかめたいのが、俄に関西へでて恒子を訪ね、さらに無声を吉野山まで追いかけた天知のねらいであった。（夢合せ）とは、それをさ<sup>さと</sup>しているみたい。

訪ねてきた破蓮に声をかけられて、その女は驚く。（一といふて十を咄る恋の苦勞人なればや、暫らく呆れしやうなりしが忽ちさと顔をあからめて、おやとばかり居づまるを直す）。そこで破蓮は、（さればよ花<sup>あはら</sup>の脂に身の垢を煮られて破蓮坊<sup>はつしん</sup>と法身し、見らるるやうなる円い頭<sup>あたま</sup>は心の円い謎）（木のきれ石の片われ）ではないから、（髻ある尼さまの御胸の底いかが）、それをききたいというと、女は一度は躊躇するが、いいよられるので、（宜しからぬ筋のお方に悪い事聴かれまつりて口惜しう侍れ、何事も知りぬき給ふに今更せんないこと、よし浮世は破れ破れと吾身をなして侍れば、捨ててこそ浮かむ瀬もある情の洩に身の懺悔とも思召せ）と、破蓮に向って身の上を語りだすのである。それによると、妾は十七、八才まであばれ者であつたが、十九の暮に父を失い、そのために弱い心となり、父の遺言の許嫁と心ならずも一緒になってからは、苦しいことばかりであった。と、そこまでくるともう泣きむせんで、女は話すこともできなくなる。そこで女の側にいてつき添う乳母が、女に代って、そのあとを破蓮に告げるのであるが、その乳母の話によると、女には幼い頃から仲のいい三郎という友達があったが、二十才頃から三郎は訪ねてきても女とうち解けぬようになったので、女の父が死んだあと、乳母は父がとりきめた許嫁と結婚することを女にすすめ、こと納って安心したが、その頃から三郎は女を慕う恋の悩みに病む人となり、到々その苦しみに死んだので、それいらい女は許嫁の家を去り、亡くなった三郎の墓所に近いこの庵に住んでいるのであると、乳母もまた涙ながらにながながと、女の身の上を破蓮に述懐する。女も、漸く涙を押え胸をなでて、（苦しとも苦しや、胸裂け心たたん迄も思はるるは言はで忍

ぶの恋にもや）（逢ふはいや逢はぬも<sup>つら</sup>苦胸く、<sup>かた</sup>談らふもいや談らはぬもいや）（狂るひ死ねとや迷へとや）（契りは此の世に絶へ果て侍りぬ）と、女は破蓮に、今のこころのせつなさを告げるのである。

さて、「夕顔ぐるひ」のこの辺は、さすがに天知も露出をさけて厚いベエールで覆っているが、後年天知がもう一度発表する吉野山の記録「旅のつづれ」と照合すると、この部分は、吉野山へ入った天知が、最初、奥千本の路上で、意気銷沈している無声をみつけた情景、或はその夜吉野の宿で、半生の苦学もうたかたのように消えたと思きながら、関西放浪にでるまでの生活事情を天知に述懐する無声の姿などの手のこんだ作品化である。ここで女の（許嫁）といっているのは、当時無声を日本橋の秋谷商店の養子にさせ、事業家に育てようと考えていた無声の恩人吉村忠道をさしているといいたい。吉村忠道に島崎春樹を子供の頃から委託したのは、父正樹のきめたはからいであつた。（三郎）と名づけているのは、服部家の三男甚七郎の名から発想する芭蕉の意か。それが適当でないにしても、ここで三郎の名でいおうとするものを、思慕する芸術上の先蹤であるのとれば、この辺の寓意は解けるように思う。（乳母）とは、源氏物語によくある手法をまね、無声の苦しい訴えを補填する天知自らを仮託したいいかたであると考えたい。女のあげる最後の声は、恒子と輔を慕うせつない無声の声なき声である。

女と乳母の長い述懐をきいて破蓮は、心を勵まし気を軽くして、（悲しき御物語り近頃の嘆きを覚え申したり、さるにても疲れ給ひし御身もて遙々石山寺への御日参、強き御心の程も思はれて尚更おいたはしく思はれぬ、御歎きのふしはさることとつやつや無理とは思ひ参らせねど、密かに御祈願を承れば、先立たれし君様の御命日までに生命召し上げ給へなどと、御気象にも似合はぬ御立願、些と御心得が違ひ申すべし、御無礼なれども愚痴の御迷ひかと、実は今日わざわざ御異見申したさに参りたる仕義）（迷ひの雲を遂<sup>おつぼら</sup>払ひ些と浮き浮きと成り召され）（破れかぶれの恋なれば大きく括る<sup>しゅじやう</sup>が衆生へ功德、何と合<sup>が</sup>点<sup>てん</sup>が参りしか）と、破蓮が（大慈大悲の説法）をする。この辺、天知はどこまでも寛容な態度で、芸術の壁と二重の恋愛とに苦しんでいる無声に対して、すべては迷いだから、その迷いをすてるべきだと助言したというのである。ところがそういう破蓮に対して女は、迷ひの自説を滔々と主張し反抗してくる。

（女は姿容を改めて。御心ざしは嬉しうてお胸のきつい広い所は些とあやかりとうも侍れども、私のやうな女子心にはそうは参らぬもの、却つてそう参らぬが嬉しき女子の価値<sup>ねうち</sup>かや、恋と無常に身を置きて孰れに悟り孰に迷はん）（迷ふが浮世悟れぬが情<sup>ねうち</sup>の価値）（悟りといふも迷ひまよひし詮<sup>せん</sup>方<sup>かた</sup>なの諦め道、いはば迷ひ込め臆病）（どうで浮世は迷ひの國、現実とやらいふ形ばかりの世なりせば、げに狭苦しうて厭悪な牢獄に侍らずや、来世の詮議立てに迷ひの説法御無用に侍り、楽しき天の国とも言へ来世の極楽浄土とも言へ、これも迷ひの花なれや）（皆がみなみな悟られては此世はたまつたものには侍らず、容易<sup>たやす</sup>いようで困難<sup>むづか</sup>しいは死の字なり、迷ひといふ犠牲<sup>い</sup>の真心<sup>まごころ</sup>なくもあらば之れを読むものなからまじきよ、多くの人に死なんとするは易くもあれ、一人の爲めに死なんと心の心は難くもあるなり）（恋の至誠ならずしては誰か浮名の犬死に人知れぬ終りを好むもの侍るかや）（迷へといふて迷へるものにてなく悟れといふてどれが悟りやら訳<sup>わけ</sup>が分らず、浮世の迷ひといふもの斯るものに侍るべく、迷ひの浮世といふものも斯るものに侍らんかし）と女は語りつづけ、（御分りに成りましたやらとほほ笑む）というのである。そこで破蓮坊は、（呆れ果てて之

れは平凡<sup>かいなで</sup>の迷ひ児でなし、百も承知二百も合点の迷ひなり、それに意気地<sup>きぬ</sup>の衣着たれば、脱<sup>ぬ</sup>がそとすればいよいよ募るべし、まだ此勢ひにては何を言ひ出すやも知れず、蓮坊上人様には済度しがたきやも知れねば、脚下<sup>あしもと</sup>の明るい中暇申すが上策よと、少し愕いて修行の若かりしを自ら慚ぢぬ。）と破蓮は女のひたむきな迷ひの説をきいて全く途方にくれ、慈悲の説法をあきらめるのである。この辺が「夕顔ぐるひ」のクライマックスであり、吉野山中の会見で無声の語った発言内容が比較的詳細に記録されている個所とみたい。「哀縁」の削除部分と触れあうところも現われている。天知日記が、（果して大微笑の悟ありと聴く）とか（燈下無声の激語を聞く）とか（秋羅に期待を持たしめたる吾不用意に愕く）とか記していることの作品化とみたい。この辺をそういいうことは、この作品のこれにつづく終末が、天知日記と全く符節を合せてくるからである。その終末部分は上記につづいて、（岩をも徹<sup>とほ</sup>す御心ざしの程申す言葉なし、思ひ余りあれど最早何とも申ませぬ、縁ありて哀れの御袖に触れしと思へば、之れにて心も安く帰り申すべし、御縁浅からずば又の日に御目にかかるべしと。そこそこに暇を告げて外方へ出れば、さようならばとゆかしき声を耳に残して二歩<sup>ふたあし</sup>三歩あゆび去り）破蓮はもう一度ふりむいて、（記念にと思ひ出しけん、携へたる扁蒲瓜<sup>ひんぷく</sup>を破りて五ツ六ツの種子を取り出し）（思ひの印標は是れに籠り申すと言ひ捨ててあとをも見ずして一目散に走るは走るは。）とかいている。天知日記の明治26年4月22日の条は、（山中の温泉に浸り突然帰心を促す。無声先づ下山、狂的也。大阪駅にて分袂、彼は神戸へ、我は帰京、囊底を無声のために払つて、吾は車中絶食坐禅。）となっていて、まさに「夕顔ぐるひ」の終末とピッタリである。それどころか、（縁ありて哀れの御袖に触れしと思へば、之れにて心も安く帰り申すべし）とは、すでに二ヶ月前方、無声のがわから発表した「哀縁」に向つての諷刺をきかせ、天知のがわから放った矛先の閃きともいうことができる。天知も見事な手練を示したものといたい。

『春』の一行と、天知日記の数行と、或は天知に宛てた藤村の当時の書簡と、これらの僅かなことば以外には、無声と天知の吉野山における劇的会見を知ることができないと考えられていたことに対し、筆者は主として「哀縁」と「夕顔ぐるひ」のうえで二人の会見の内容を考察し、この二つの作品の資料的意味を提唱してみた。本論の主旨はこれにつきるが、なおこのことを明確にするために、こうした作品化のあとさきにある二、三の資料を展望しこの論の補説としたい。

明治26年3月7日、神戸から文学界連中に宛てた無声の書簡のなかには、これから吉野山へはいって劇詩の第三作「朱門のうれひ」をかこうと思うから、護良親王終焉記とポーランド亡国史とを吉野の方へ送ってくれと依頼している。吉野山へはいったのはその直後と考えられる。或は天知の『黙歩七十年』に収録されて漸く日の目をみた無声の「訪西行庵記」には、吉野山で西行庵を訪れた日を（三月十四日）と記しているので、いづれにしても無声の吉野入りは三月中旬であつたといえよう。下山は天知日記が記す（四月二十二日）であつたから、無声の吉野山滞在は一ヶ月余にわたる。

天知が吉野へくる丁度一週間前、無声は入山早々ひとり西行庵を訪れ、その記録として「訪西行庵記」をかいた。これは、（明治二十六年仲春誌之 古藤庵）と署名し、（はらからと袂を分ち、むつまじきかざりに別れをつげて、ただただものくるわしき一筋にうかれそめ、難波西海のあたりをさまよふこと二月あまり、菅笠の破れたるをいただき、身には合羽のふりたるを着し、おもくるしき旅の調度ども前後に背負ひたるさま、まことに怪しき姿）

で西行の木像に向い、折から（携へたりし家集をひもときて風より外にとう人もなきといへる歌ども思ひくれば、千年のむかし捨てはてし身にも桜のかげの慕はれてかかる所に結びなしたる草庵のあはれ、ただただ涙も落ちぬべきばかり也。）と、芸術上の先蹤を思慕してやまない無声の純情さが、まずすなおに記されている。つづいてこの記録は、（はらからの手に老いたる母を托して朝夕の孝養もおろそかなる身はただ山河風雪にただよひ、久しく戯曲を好んでただこの一筋に瘠せ衰へたるものくるはしさ）と、身の近況を西行の木像に報告し、（知るや知らずやシェクスピア、ゲーテをはじめとしてダンテ、ミルトン、シルレル、バイロンのともがらあまたこの国に入り来り、世にきこへたる逍遥、鷗外など没理想論のすさびにとつ国の詩人をあげつらふ）と、文壇の近況を報告しているが、次第に内部の心情を吐露する段階になると、（戯曲の道もおとろへて近くは默阿老人のうせたる）と、私淑する默阿弥の死をかなしみ、（よしなきことども言ひ捨てて知己の間に詩人などと呼ばれんものものしく）と、自己反省をしながら、（是非胸中にたたかふてこれが為に身安からず）（腰間にさしはさむ風雅の一刀ただだ詩神をけがさじとこれのみ心にかかる）と、吉野山へ入る前方の恒子とのいきさつに微妙な筆がうごいている。従って無声のこの心境報告をきいた上人は、（笑ふが如くうそぶくが如き）おももちであつたと記し、この文章の最後は、（やがて宿にかへりて旅燈のもとにひとり故人のふみをひもとき、月花を友として禽獣のそしりを免かれんと思ふのみ。）と筆を擱いている。「訪西行庵記」は、独りさびしく吉野を放浪する無声の姿と心の記録であって、ここには天知の闖入によってかきたてられる無声の恋愛感情の噪音はまだ現われていない。

ところが、天知に送られたこの「訪西行庵記」を、当時天知はそのままふせてしまって、却って自分がかいた西行庵記を、この方はただちに「対茶寂話」と題し、「文学界」の4号〈明治26年4月26日発行〉に、北村透谷の「対花小録」とならべて発表している。当時のいきさつから考えると「訪西行庵記」を未発表にした事情は、複雑ではなかったかと思われるが、この号には無声の方でも、枇杷坊と署名を変えて作者をあいまいにし、同人達から怪しい論文といわれた「人生の風流を懷ふ」を掲載しているので、或はその事情が手伝っていたともいえよう。まず透谷の「対花小録」は、旅先の無声が（透谷兄の西行みだし）といったのに應えた小文であるが、花西行の歌のころに向うさすがに透谷の卓見を示している。この小文の冒頭で透谷も無声と天知の吉野行に触れているので、それを拾ってみたい。（世を捨てしといふにもあらず世に捨てられしといふにもあらで春のはじめに風流の旅に止りたる古藤庵は、花に先ちて吉野の奥にこもり、悠々として古人の風雅をたずねんとせらるるに、都よりは又寂道の発心やみがたくてや暗光廬主〈天知の別号〉がはるばるの吉野もうで。友をたつねて天地を遍遊すると言はれたる無声ぬしの満足おもひやられたり。われはひとり山庵に蟄居して花の消息にもたがひはかなき蝸牛のからを身に負ひて空しく花に背きたることかへすがへすも惜まるる。）と透谷はかいている。「対花小録」のこの冒頭句だけでは、この透谷の小文が、のちに藤村の自然観を根底からゆさぶって行く関係にふれることはできないが、さすがに透谷は、無声にも天知にも偏らず、吉野へ出向いて行く二人の行動をおだやかに覗いている。透谷がそういう姿勢をとっているのは、この二人の行動派とは異った花に対するところを持っていたからであり、それを書きたいのがむしろこの小文のねらいでもあったからであろう。

しかし天知の方はそうはいかない。関西へ出発した天知のころは、花は花でも、吉野山

の花ではなく、もっと人間臭のつよい花にねらいがあった。その天知のこころをまざまざと示しているのが、「対花小録」とならんだ「対茶寂話」の一篇である。これも冒頭から古藤庵がとびだしてくる。（花神の招きにもだし難く都を走り出でて芳野の山に迷ひ入りしは、偏へに花精に酔ひて山籠りする古藤庵主を訪はんとしてなり、此心を鎌倉の松吹く風に送りたるは透谷庵なり、骨二つならべて埋まれ花の塚（透谷）塵塚に花西行の琵琶の音と都に止まる透谷庵の風姿に思ひを遣り、伊勢路より播磨に入りて家人秋羅＜恒子＞の面影に天外の致を訪ひ須磨寺に今昔の袂を連れねて舞子に天舞の松鬼を弄し、紀の高野に菫萱道心のなさけを味はひ、白骨堂に人生無量の迷窟を哀しみ、終に涙を遂ふて芳野の山深かき春を訪ふ、故知の音づれ待ち顔なる古藤庵の情けに一夕の袖ぬらすを厭はず、先づ故上人に逢はばやと共に山深く筈を曳く、一目千本の噂き今更のように思はれて、唯花に迷ひ花に狂ひ花に酔ひ花にあくがれ、塵界幾斗の汚気を吐きて仙気漸く骨に鳴る）（露とくとか試に浮世すすがばやと蕉翁が一呼吸に流るる苔清水に來りし）。まずここでみられることは、天知の吉野出発に際し透谷が餞別句を詠んで送っていることである。この情景は、後年天知が発表する「旅のつづれ」に詳しく記録されているのでこれについては後述したい。天知が関西へ入ってから行程の記述については、ここにかいていることと天知日記とは符節が合っている。神戸から恒子とともに須磨にでて遊び、高野をまわり、吉野へ入り、その第一日目の夜古藤庵のことで袖をぬらし、そして二日目には無声と一緒に西行庵を訪ねたというのである。但し天知日記の方は、この二日目にあたる（四月二十日）の条に、（山中俳偈、莖を拈して苔清水に浮世を洗ふ）という一行だけの記録しか残していないが、「対茶寂話」の方は、むしろこの（山中俳偈）が中心になってくる。（形ばかりなる西行庵に近付けば、鬼気頻りと膚を襲ふて、魅か魍か、怪しくも庵中に談らふ声す、古藤庵と目をくはして黙然拜聴すれば、骨高き詩鬼と血の枯れたる茶骨との二怪が打談らふにてありけり）と、西行庵を訪れた天知と無声の二人は、庵のなかからきこえてくる詩鬼と茶骨の問答に、顔を見合せながらききいったというのである。その詩鬼と茶骨の15回にわたる禅問答は、（試みに茶骨に問はん抑も利久は何の為に茶を好むや。茶骨答へて曰ふ茶は物外の味ひあればなり。）とか、或は（ひそかに草庵に来て茶を盗むものあり、君これを追はんとするか）（死して茶を飲まんと欲する者あらば乃ち如何）という詩鬼の間に茶骨は、（花の盗人一枝に一指を斬らるるはありとも、草庵に茶を盗むの禁制なし、寧ろ其殊勝なるをほほ笑むのみ）と答え、こういう調子で展開している。二怪の声を天知と無声が聴き入ったといっているが、ここで（詩鬼）とか（茶骨）とか設定したものは、すでにその名が示すように、二怪のなかにも（無声）と（天知）とを投入した仮託的手法であって、この問答は二人が西行庵を訪ね、そのあたりで当今の文学について大いに論争をたたかわしたことの作品化とみたい。惜しいのは、「対茶寂話」では、それが二人のそれぞれの立場をとっているのではなく、作者は茶骨の立場でどこまでも一方的に、詩骨の問いを、天知の風流観で、つき放して立っていることである。とにかく無声も天知も吉野山へはいった直後に、各々こういう記録を持っていたのであるが、さすがに当時は恒子にからむ二人の姿の露骨な表白はさけていた。

一応こういうおだやかな記録だけで、その後も二人が吉野山に関する制作を、この年の後半までしばらくつつしんでいることができたというのは、激しい反抗を天知に対してぶちまけた無声ではあったが、吉野山を下山してよく考えてみると、今の場合、パトロンの天知を失うことは経済のうえで許されないので、吉野の行動をほどなく天知に詫びて、いったんこ

とをおさめたからであった。これについては下山以後の書簡が、その姿をよく示している。4月22日に下山した無声が、その月の30日には、神戸の宿から天知に宛てていち早く詫状を発送している。（過日は遠路の処を御尋に預り、思はざるところにて御対面、孤心羈旅の身の上には喜び言葉にあまり、御厚礼の外無御坐候。御拝顔己に夢の如く、よしの川の孤渡をこえ、梅田の宿に別れんと思ひ、忽ち驚かされて深更の袂別、まことに夢の如くに被覚候。先々御無事に御着京の旨、安心仕候。）（愚生義も深更に神戸着、荷物を背負ひ、毛布を着、檜木笠をもちたる風体、いかにも怪しげなれば巡査にとがめられ、大笑の種と相成、其夜あまり更けたれば「畠中」に一泊、翌日より貴庵のおとまりに相成候部屋へ風雅の貧窟をかまへ、至て閑静に御坐候）（これならばドラマも書けそうなれば、しばらく逗留）（はなれては会ひ、会ひては別れ、うきよの波にただよひて、さてはよしの西行庵花下の風狂、日頃力とたのむその人と、思ひのままの雑言吐きちらし、今更面目無之覚え候。旅にての恥は万事無責任とあきらめて、たはむれもかなしみも吉野川へさりと流して、神恩むなしからずばたびねの味ひを心にとめて、ただただ天命をつつしまんと、先は一筆）。つづいて5月20日、同じく神戸の宿から天知宛の書簡ではこういっている。（先日は御芳紙<sup>たしか</sup>に相達、しみじみと拜見仕候。）（ただただしたしき杖にすがり、今日迄露命無恙罷在候事、すでに感謝致居候処に御坐候。風にいたみ花になやまさる古藤庵を、決して決して冷然たる政治家などと一緒に御覧被下間敷、誠に誇る可き事もあらば缺点の多きと弱き事にもあるべきものが、万々御申越の條々むねにみちみちて、弱きを忍びかなしみをこらへ、あるときはもろくも路頭に相果て候かと、思ひしこともあまたたびなるにもかかはらず、無限の旅愁をつつみて風雪の間にさすらひ候事、実は心情、筆紙に難尽御坐候。）（ああ詩神よ、予は汝をしからぬ一命を捧げんとするに、汝は反て予を悲痛の境に追はんとするか。予は人生を重んずることかくの如くなるに、汝は反て予をして、人生を軽んずる如きものとなさしむるや。嗚呼、予は詩神を認めたるを悔いんか。詩神を認めざりせば、かかる悲慨もおもはざりしものを。予は人生を重んずることを悔いんか。人生を重んぜざりせば、かかる風狂も知らざりしものを）。その後、5月29日には、石山寺門前で始めた自炊生活の近況を天知に報告、3日後の6月1日には、恒子にも同様の便りを出している。恒子宛の終りの方には、こんなことばが見えている。（ばせふも女友あれば心敦一ならずと申候。僕等如き心志未だ定らざるものは、殊に左様覚居候。生は女友として秋羅姉を待つよりも、知己として、諫友として、又姉として待たんことを望み居候）。こういういいかたを恒子にかき送ったこの6月21日になると、石山から無声は、いよいよ天知に宛てて、次のような誓いをかき送る事情に陥ちこんでいる。（かへすがへすも常にミューズに近づかんとして、常にミューズに遠ざかり候事は、口惜しきかぎり<sup>に</sup>に御坐候。風さそふ雲のまにまにかかる飄泊を事として、わびつくしたる草の枕も、ひとへにミューズを思へばなり。ミューズをあやまり、兄等の心にもとらんとて、都をうしろになし、捨身懸命の行脚に罷出候儀にはなかりしを、心を花鳥に勞し、風雪にさまよふ身は、深く女友に交るが為に心甚だ敦一ならず、ことに心志未だ定らずして、ここにたづさはるとき、之が為に道のほだしと相成り、遂にはミューズの心にももてるごときことあらば、兄に対しても申訳無之と存じ、広瀬姉の如き、その知己諫諍の友として、且又俠友として、まことに忍びがたきところも有之候得共、これも道の為にはかへがたく御坐候間、我心志の動かざる迄、文通は一切やめに可致決心致候。今後衣類などにつき用事もあらば、兄を通して申入被下候様、申遣さんと存居候。まことにかかるちひさき了見に



ては、兄等に対して愚生などの仕事は、実にこれからなりと恥入候)。恒子と直接に文通することは、今後一切とりやめ、すべて天知にわかるようにするから、その仲介をたのむというのである。天知の誤解をさけるためには、かかざるを得なかった忍びがたい宣誓書であった。今日に残る天知宛の書簡で、関西放浪期のものはこれが最後である。この年、9月中旬にもう一通あるが、恒子のことには触れていない。だから無声の詫びで、いちどことは平穩に戻ったのであるが、それは表面を糊塗しただけで、吉野山のいきさついらい拭えない心の傷を相方ともうけていたのであろう、「哀縁」の発表に動機づけられて、こんどは作品のうえで両者の古傷が露出し、諷刺と仮託の手段に訴えて火花がたったといいたい。

無声の誓いが表面を糊塗したにすぎないという事情は、翌明治27年1月1日付の三通の書簡がそれをよく語っている。すでに浜町の吉村家へ戻った無声は、多事多難であった過ぎし一年を回顧して、天知と恒子と俊吉少年とに新年の挨拶状を送っているが、まず天知に宛てた書簡では、(思へばはかなきことを心あてに、草の枕の数を重ねて、東西に流浪せしこと、今更心にうかびくごとに、第一に兄が情誼の厚きを感じ申候。見すまじき姿までも見せ、あさましき風情も、大方寛容なるあたりのあはれみにさへもれべきほどなるを、これも身の狂妄と見て、ほしいままに生をして泣かしめ、ほしいままに生をして笑はしめ、実に今日この年を迎ふること、懐顯感慨、是事に御坐候。この間思へば、ふとしたるあやまちより、あるひは広瀬姉の如きノーブル・ハートをあやまらせ、あるいはものぐるはしき姿して、夏の夜のふけたるとき鎌倉の庵に兄が観念の坐を驚かし、尚あきたらで風狂のとどまるところを知らず、とどまらんとしては狂し、定まらんとしては乱れ、ひとへにおろかなる心眠の曇りをはらひつくさずして、諸友の笑ひを招く)と、天知には切々とした心情を吐露している。次に恒子宛の書簡では、(思へばふつつかなる小生の為に、高き姉の心をなやませしことも少なからず、かりそめに思ひなしたることわりより、反て姉の如きノーブル・ハートをあやませたること、かまぐらの情誼深き友にむかひても一言の申訳も無之、且又これが為に友をして姉に於る友誼の上に迄も、よしなき我身のあやまちを及ぼし、昨年の今月は実に家を出でて鎌倉の廬に走りしことなど思出候に、さすがに懐旧の情難堪存候)と、この書簡もここまでは、天知に送った感慨と同じであるが、この先には、次のような個所が現われてくる。(思へば東を去て御地の方へ参らんと、一度かの雪の下の廬にとどまり、終夜祈などして、互に御尊致候折に、友の姉に服するは姉の自ら知らざるところにありと申されたる一言、今に耳にのこり居申候)。これによると、天知と恒子の関係を、無声は十分に承知のうえで関西へでかけたことになるので、天知を裏切ったという意味では、この発言は重大である。しかし天知と恒子との関係が、天知の方からの一方的なものであったと無声はここで記しているのに、後年『黙歩七十年』で天知の語るところでは、恒子が天知に肉迫したというのであって、天知と恒子との関係がこれとは逆になっている。どうしても、天知・無声・恒子三者の関係は、ことの当初からこじれているといわざるをえない。各々が自己本位のねらいをもちながら、それを極力隠蔽し、他を制約するために、相互に牽制しあっているからである。この発言よりもむしろ問題は、この書簡の最後に現われてくるのであって、天知にかくれて、無声と恒子とが次のような打合せをしている。(御文通も被下候折は俊吉様迄御送被下度、御察被下候通り浜町宅などは至て旧家風にて、随而よしなきところにクリスチャンなどと違ひ候きびしき習慣も御坐候間、今後もしばらくは御文通も思うやうになるまじくかと存居候)。これは世話になっている浜町の吉村家をはばかって、恒子からの文通は

甥の俊吉少年を経由してくれという依頼である。半歳前に天知と打合せた手段を、ここでも恒子と示し合っているのであるが、浜町の家もさることながら、それと同時に、天知に対する思惑もあってのこととみたい。というのは、もう一通、この1月1日に俊吉少年に寄せた書簡によると、その文面のなかに、（昨年御地へ上り候折）とか、（其後とんと御無音のみ申上候）とか、（神戸の姉様にも）（いろいろ取まぎれ御無佐咄のみ申上候）という語句が現われていて、これらは、恒子宛書簡のなかの（かれこれとりまぎれ其後は文通も不申上）という語句の裏書とみることができるので、恒子にも俊吉にも、石山いらいはじめて便りを送っていることがよく窺われるからである。それだけに無声は天知をはばかり、恒子と慎重な打合せが必要となっただけであろう。年頭からこういう打合せを、実生活の方で、二人がしていることは、天知との誓いが、表面を糊塗するための手段であり、一時的なものにすぎなかった事情をよく示している。或はまた「哀縁」や「草枕」が現われてくる事情を裏づけているともいうことができよう。このことは天知の方向からみても同じで、無声が「哀縁」を発表すると、それに刺戟されて、ただちに天知も「夕顔ぐるひ」で応戦しているのは、吉野山の出来事いらい天知の方にも、割り切れない気持が生じていたからであろう。そしてこういう内在する二人の不信感が、形をとってそこに現われてくる順序は、「哀縁」と「夕顔ぐるひ」の発表が示すように、いつも無声が先鞭をつけ、却って年長の天知があとを追う、無声は天知をひきずりまわしているのである。ところが、天知の先を行く無声のこの姿勢が、「草枕」の発表を境にして形をかえ、無声が藤村を名乗る頃、無声から脱皮した藤村は、こんどは、いち早く、天知や恒子にからむ感情を切りあげてしまったといいたい。明治27年の6月になると、藤村は「文学界」の18号に、「山家ものがたり」を発表しているが、素材のうえではこの作品もまた吉野山の経験拾っている。しかしこのあたりから初期藤村の作品は、文学的にもきわだった成長を示すのであって、そこにはまだ透谷や露伴の影響を露出する姿はあるが、天知を相手にする構想などは全くかげを消してしまったといえる。こうした藤村の変化を、親友の平田靉は、さすがによく見ぬいていて、当時「文学界」へ寄せた「秋風蕭條記」のなかで、（古藤庵といふ男先づ去り）（藤村僅かに余喘を保つ）などといっている。ところが、天知の方はそうはいかない。吉野山の会見があってから4年後、明治29年8月の「文学界」44号に、天知は（四年前の手記）とわざわざ註を入れて「旅のつづれ」を発表し、吉野山の出来事への執念をなお断ち切れないのである。翌月の45号に藤村は、「草影蟲語」の詩群を発表しているから、いよいよ『若菜集』となっていく詩の詠歎が、藤村のほうでは始まっている頃である。

天知の「旅のつづれ」のなかの第三〔芳野行き〕は、（春深くして愈々芳野の奥を<sup>さぐ</sup>探らばやと先づ鎌倉の里に入るに透谷庵ここに追来りて一夜の物語りに<sup>かりそめ</sup>苟且の別れを惜む）と、まず書きだしに天知を見送る透谷が現われてくる。そして（<sup>かね</sup>豫てより芳野に山籠りする古藤庵の心を悲む程に透谷筆を執り）、（骨二つならべて埋まれ花の塚）と、その晩透谷が天知のために餞別の句を詠んだことを記している。透谷のこの句は、すでに天知が関西放浪の旅にでる無声に送った（骸骨二つ重たさうなり霜の旅）に呼応し、「文学界」連中の風流心をよく示しているといえよう。「旅のつづれ」は、これにつづいてただちに吉野山の旅の記録に入るのであるが、西行庵を訪ねたことについては、西行庵で山家集を繙き、（円位が像の前に坐すれば今昔の思ひ身に迫りて春の日も漸く暮れなんとす）と記すだけで、天知日記と同様に、この紀行文も「対茶寂話」で描いたような、西行庵で二人が文学論争をしたことには触

れていない。むしろ（春の日も漸く暮れなんとす）と、西行庵を退出した時刻だけをあきらかにしている。二人の激論は、その夜であった。（此夜友と語らふにくさぐさの悲しき物語を聞きつ、敢果なき思ひに打沈みて憂きには漏れぬ花の雫を酌みかはす、学びの窓に志を立てしより爰に幾歳、何学ばんとて多恨の世に出で来りしか、何事も思はで其頃の儘なりせば心易く今日の営みに人並々の誉を得て門を高うし名に誇り、親々をも喜ばし自らも心易く稚見の猛者にて世を暮さんに、なまじ書を読み人情の秘奥に触れしこそ惑ひの種子なれ、思ひし望み打捨てて苦しも思はぬきわにさすらふこそ怪しき夢の露にこそあらめめげに移らふ心のすさまじくもあるかな、いつまでか斯る心にてあるべきや、いかで是より心を破りて暫し涙を浮世に預け世の営みに悲き夢を打消して人の目吾が心を欺きてんかと敢果なき事まで思ひ出でて果てはいかなる夢にか泣きし〔中略〕芳野山思はぬ露にぬるかな木の下やみに花をたつねて）。この部分は、当夜無声が半生の苦学のところを天知に訴え、次第に自嘲的になっていく姿を、比較的無声の立場に立って、忠実に記録している。おそらくこの辺は、執筆と発表の時期とが「旅のつづれ」とあとさきになった「夕顔ぐるひ」の乳母の述懐の原拠となっていたのではないかとみることでもある。しかしこの無声の悲しい訴えにつづく肝心な激論の部分を、「旅のつづれ」では、（あられぬ事まで思ひ出でて果てはいかなる夢にか泣きし〔中略〕）と、筆を集約し、しかも〔中略〕のなかに逃げている。逃げているのは、中略の部分は、すでに4年前に発表した「夕顔ぐるひ」のなかで十二分に作品化していたからであろう。さて、この紀行文の最後句は、（悲き山に探ね入りていよいよ花の露を擔ひくだるに芳野川白く流れて桜の渡し淀みなく、水ころなくして往く人を止むるにも似たり、心はいとど破れしように堪へ難く走るが如くに道を辿り鬼に追はれて只管入京の日を急ぐ。）と、ここでもまた、天知日記や「夕顔ぐるひ」と同じように天知にとつては、花の吉野山が悲しい山となり、透谷に送られた風流な出発の姿が、一転して、鬼に追われるみじめな帰京の姿となっている。

このみじめな思いが、ここから更に40年に余る歳月のあいだ、天知のところに巣くっていたのであろうか、天知は昭和13年に生涯の回顧録として刊行した『黙歩七十年』のなかで、当時の無声や恒子を、自分の立場を擁護しながら、なお執拗に語りつづけているのである。藤村は、すでに『夜明け前』を完成し、ペンクラブの会長として出向いた南米の旅もおわり、老成円熟の筆で、静かに『巡礼』を執筆していた頃である。さて、天知が『黙歩七十年』で、無声の関西放浪のあとさきについて語るところによると、明治25年の暮、21才の無声は、吉村家の歳暮の鮭配りで市内を走りまわっていたが、その途中天知の家へやってきて、（蒼い顔に苦悩の色を漂へ）、明治女学校講師の退職届をさしだし、（佐藤輔に魅せられ）（逆も堪へ難い苦悩ゆゑ西行芭蕉の跟を追ふて、的なき旅に出たい）（旅費万端の厄介になりたい）と訴えた。その時天知は、（古徳に魅惑された青年客気の過熱だとは思つたが、其純情さには泣かされた）ので、文学界創刊を目前にしてこの申出に（稍々力抜けの感じがした）が、（想ひ詰めた悄然とした姿の憐れさが強く同情心を誘つて、飽くまで力になるからと激励した）と、出発前方の様子を回顧している。無声の出発時については、翌明治26年の1月に入ると、21日には無声が（出立の辞別）に来たが、22日にも（再訪）したので（旅費を整へ）て渡し、30日鎌倉の天知の草庵で、無声を見送る前夜祭をひらいたと語っている。その夜は月のある雪景色、星野兄弟と無声たちは、徹宵神を祈り、語りあかし、2月1日の正午に大船発で無声は沼津へ向ったというのである。ところが天知は、（島崎胸底の

秘に付き同情に堪へず、密かに本人へ漏らしたのは悪い老婆心であつた）と、無声の出発後にとった自分の行動を反省している。助けるために生れてきた男、それが天知の本来であったか、輔に無声の意中を伝えて「夕顔ぐるひ」の乳母の役割を演じているのである。恒子を紹介したことについては、（古藤庵の今度の旅行を私が気遣う余り、私と親しい此恒子を紹介してどうか私同様に思つて懇待を乞ふといふ添書をつけたので、一も二もなく承諾して懇待したのである。そこで古藤も、故人に遇ひたる心地したとか、骨ある一種の詩人だと云つて、大いに孤影の安居を喜んで此子を秋羅と名付て居た）と語り、無声が恒子を秋羅と呼んだいきさつや、輔の面影を恒子にみたという点にも触れている。さて、『黙歩七十年』で天知は、吉野行をどう語っているか、次にその辺を拾ってみよう、（古藤が吉野へ着いたのを待つて、私は直様出立した。神戸の恒子を訪問して高野から吉野へ出で、奥千本へ登る路傍で古藤の姿を認め、湧出る友情に胸が塞がる計りであつた。苔清水や西行庵を偲ぶ暇もない程、現時の低級文学を慨歎して、日の傾くのも知らなかつた。其旅燈の許に話が肅やかになつた時、前週まで親密な秋羅の口頭から漏れたといふ其誣言を聞かされたには愕いたが、更に不審の眉を顰めた。）ここには吉野へかけつけた天知が路上で無声をみつけ、天知日記の方で、（孤影稍々完からず）と記した二人の出合いの情景があり、或は「対茶寂話」で、詩鬼と茶骨の禅問答に作品化した文学論争の傍もでている。しかし注意したいのは、西行庵で大いに文学を論じ、（日の傾くのも知らなかつた）二人が、宿へ帰ってからその夜語り合つた話が、やはり恒子のことに多く触れていたとみられる点である。殊にその時、自分にとって事実無根のことをいかにも恒子がいったように無声が伝えるので、いちどは驚いたが、よく考えてみると、それは無声の作為ではないかと疑わしく思われたと、すくないことばで回想している点である。一体、天知は当時恒子をどうみていたのであろうか。前述したように、無声の書簡によると、無声の出発に際し天知は、（友の姉に服するは姉の自ら知らざるころ）であると無声に告げたことになっている。ところが『黙歩七十年』では、これとは全く逆ないいかたで、天知は恒子との関係を語っているのであって、当時天知の意中の女性は、天知を慕う恒子ではなく、青森出身で明治女学校在学中の松井まんであった。だから恒子には後輩のライバルが、すでにあつたのである。従つて天知は無声が関西へでる時、（秋羅には妬憤の蟠りが潜在する時で、吾等の友情を阻害する懼れがあるから、余り熱度を高めぬやうにと忠告しておいた）、関西へでてから（古藤が大微笑靨なりと言つて秋羅に注ぐ心情はよく分るが）とにかく、出発の時には、無声にそういっておいたというのである。そして恒子のこの（妬憤）について、天知は、なお詳細にこう述べている。（教授以外の女生には一切不関焉主義の私へ、鎌倉避暑中忸々しく接近して來たのは此恒子で、其態度には少々迷惑を感じる程であつた。）（吾母に親しみ、続いて吾妹を懐け始め、終に其故郷へ伴ひて一ヶ月も効はり楽しませたのも此人である）（齡は四五才下だが、どうしても一度は嫁いだ女とより見えず、それに姿態風貌のなす所から齡上の感じがして、其のために心置きなく親しんで居たのだが、或は多少誤解させたかも知れぬ）（恒子は私に忠告した。「あなたの熱情相手＜松井まん＞は見当違ひです。一度對話させたいものと思ひます。そういう人ではありません」と。吾プラトニックは現実に迫込まれる時期が來た。彼女には有力な縁談決答時期が到來した。それは卒業帰郷の時に際したからである。）（其夕恒子が思ひも寄らず突然入來したが、此夜最後の手段としてか、女子としての乾坤一擲の動作を仕向けて肉迫して來た。）（併し当時寂寥に促へられた吾心はひた向きに北へ去り行く者の後を追つて居たの

で、斯んな悪辣な運動も問題にならなかつたかと思え、吉野の古藤を訪ふ旅にも第一に恒子を神戸に訪ひ、共に緩々と須磨に宿泊して同胞のやうな心で親しんで居た。）（何しろ恒子は質実素樸で商才に富む愛嬌人であつた。）と天知は、天知の立場で、恒子についてこう回想している。しかもそれにつづいて、（賢明で意志の強い此婦人も稍々脱線熱を無声へ送らして懷剣を贈つたり、古藤に妬心を感染させたり、友情に汚点を着けさせたりしたのも若い血の戯れであつたろう。詩人の大微笑観も、此不美人たりしがために完うし得たのかも知れない。併し後年、此婦人も夫人姿で斯う言つた。「自分同様に思つてとの添書に従つて同情して懇待したまでの事で、私は何もあんな弟のやうな一書生に心を動かすものですか。」と熱心に繰返して、尋ねもしない事を言つて居た。）最後には恒子の談話までそえて天知はこう語りつづけているのである。

この天知の長い回想の始めと終わりに現われてくる詩人の（大微笑観）とは、無声が吉野山へ入る直前、「文学界」4号に発表した「人生の風流を懷ふ」の中心になっている概念であつて、この論文で無声は、佐藤輔にむかうプラトニックな恋愛感情を、現実的な（小微笑観）のなかで論じ、広瀬恒子に誘発される感情を、理想的な（大微笑観）のなかで展開し、二重の恋愛感情を矛盾のないものにしようとする苦慮している。天知が、（古藤が大微笑観なりと言つて秋羅に注ぐ心情はよく分る）と述懐を始めながら、（詩人の大微笑観も、此不美人たりしがために完了し得たのかもしれない）と回想を結んでいるのは、相当思いきった発言であつて、無声も恒子も天知の遠い日の回想のなかでは、みじめな姿で彼らの夢の樂園から追放されている。しかしそれをいう天知自身も、みずから耳の長い目の大きい天国の悪魔となっているのであつて、いづれにしてもこの三人の関係は複雑微妙であつたといわざるをえない。無声と天知には、輔とまんとするプラトニックな恋愛対象があり、しかも天知は無声のために輔へ仲介の労をとり、無声もまた旅先で天知のためにまんのことを気遣っているが、手近い世界では、二人とも素樸な恒子に接近しようとし、しかもそれを独占しようと競いあつていたのである。恒子もまた姉のような姿態で、右にとび左にとんで、挑発的な行動をとっているために、三人のなかで醸成された感情が、とらえどころもなく、まさに空転している。しかし空転する感情ではあるが、それぞれにとっては、実は、真けんな意味をもっているのだ、それはそのつど嫉妬と猜疑の風をおこし、不安と悲哀の雨をふらせ、或はまた際限もない幻想と憧憬の夢を誘導しているとみたい。先蹤のマスクで身を粧ひ、新しいものを呼号する「文学界」連中の風流心とか、ロマンチズムとかいうものが、案外こういう感情でうごいているものであり、かてて加えて明治20年代の《青年》であつたことが決定的な要素ともなつて、彼らに一種の熱気を生んだのであつて、「哀縁」や「夕顔ぐるひ」は、その状況をよく示しているといいたい。しかしこうした二重に空転する恋愛感情の道程を辿つたことが、少くとも無声にとっては無意義ではなかつたといえる。というのは、明治27年以降『若菜集』前方の藤村の劇や小説の習作には、二つの女性像を対照的に設定する構想が次第に強くなり、やがてこの門をくぐつて、この複雑な恋愛感情は、『若菜集』の殊に恋愛詩の詩感の根拠となつていったからである。『若菜集』の官能的な恋愛詩の抒情は、佐藤輔の方向だけで説明できないものを多く持っているものであつて、恋の三角関係とか恋の破局という重苦しい詠歎は、広瀬恒子の方向でうごめいている詩感をその根底に指摘することが可能である。しかも極言すれば、この二重の恋愛感情は、その系脈を『破戒』にいたるまでのぼしているともみることのできるものであつて、丑松のイメージのなかに、お志保かと思えばお

妻、お妻かと思えばお志保といった二つの女性像が終始重複することのそれは遠い母胎でもあった。恒子は明治31年に杉山重義と結婚し、昭和2年60才でなくなっている。昭和13年刊行の『黙歩七十年』で、天知が後年の恒子の談話を拾って藤村のとどめを刺そうとしているのは、いかにも天知らしい世俗的な手段をとっているといいたい。無声と天知の人生の出合いは、最後まで＜悲しい喜劇＞であった。

### Summary

#### A Note on Tōson Shimazaki

#### Musei and Tenchi in Mt. Yoshino

#### ——“Aien—The Pathetic Relations” and “Yūgawo-gurui— Yūgawo-philandering” and others——

Tomijiro TANAKA

In the spring of the 26th year of Meiji, Tōson Shimazaki, twenty-two years old, (then he wrote under the pen name of 'Kotoan-musei') had a trouble with his patron Tenchi Hoshino, in connection with a girl, in Mt. Yoshino. Hitherto it has been said that this rivalry in love was hardly touched upon either by Toson or by Tenchi, but, in fact, the two novels, Musei's "Aien" and Tenchi's "Yūgawo-gurui", which were both published in the magazine "Bungaku-kai—The Literary Circles", half a year after the love affair, relate the trouble pretty well; so the present writer has tried to prove its truth, in this treatise.